

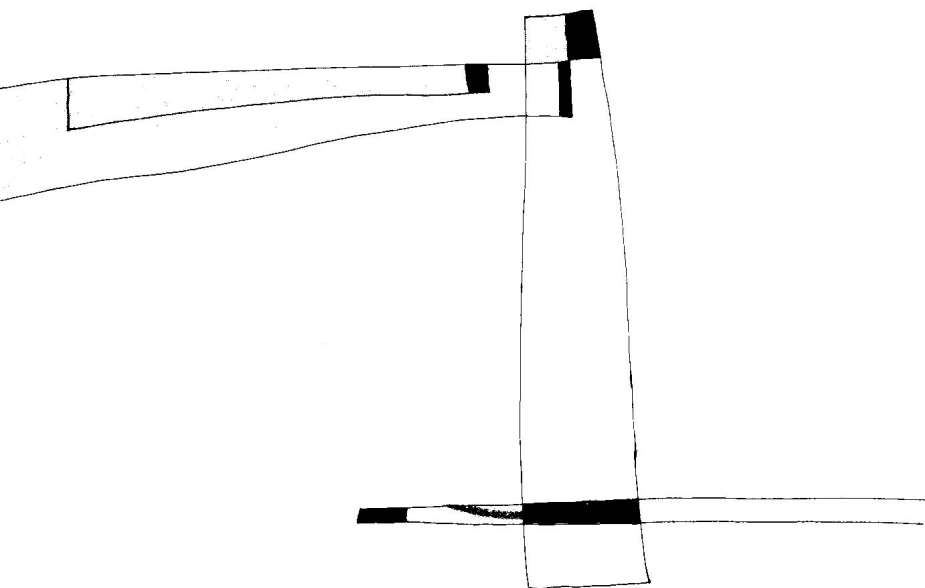
毎日新聞社編

断ち切られたふれあい

思春期病

毎日新聞社

断ち切られたふれあい
毎日新聞社編



思 春 期 病

断ち切られたふれあい

定価 780 円

昭和 55 年 2 月 25 日 第 1 刷

昭和 56 年 6 月 30 日 第 2 刷

編 者 毎 日 新 聞 社

編集人 菊 地 敬 夫

発行人 関 根 望

印刷所 中 央 精 版

製本所 田 中 製 本

発行所 毎 日 新 聞 社

● 100 東京都千代田区一ツ橋

● 530 大 阪 市 北 区 堂 島

● 802 北九州市小倉北区紺屋町

● 450 名古屋市 中村区 名 駅

0037-500609-7904

思春期病

断ち切られたふれあい



目

次

出稼ぎの村で

辺地に育つかぎっ子……………	8
疲れ切って帰る母……………	12
暗くなるまで校庭に……………	15
寂しさをこらえる子供……………	19

一流コース

東大に七年通い、退学……………	34
父の影響、子に及ばず……………	37
自ら求めた生き方で……………	41

思春期病棟

心を病んで体に変調……………	54
----------------	----

父帰り、家庭に温かみ……………	22
金銭で不在の穴埋め……………	25
父親不在が非行化に……………	29

親子とも判断力欠如……………	44
生き方に疑問持たず……………	48

幸せそうな家庭で……………	57
---------------	----

「学校恐怖症」の腹痛……………61

「遠い存在」だった父……………64

転落の陰に

優等生が少年院送り……………74

敵しすぎる父、甘い母……………77

家族の「絆」失われ……………81

抑圧の果て

古い家柄の犠牲に……………94

子の心、親は知らず……………97

独り立ちできるよう……………68

幼少年期、放任のまま……………84

親次第で甘い人間に……………88

ストレスを積もらす子……………101

取り戻す人間関係……………104

少年野球の効用

厳しい規律と練習……………110

よその子も親も一緒……………113

挫折を知って成長する……………117

地域社会の教育代行……………120

お年寄りの出番

毎週土曜、教壇に立つ……………126

民話の“雰囲気”を……………129

孫たちの心の支えに……………133

大事なものが欠ける……………137

用務員さんの目

ふれあい深かった昔……………142

個性をなくした先生……………145

恵まれすぎの子供ら……………149

「生きる力」を

“人間らしさ”を教える	154
考え、行動できる子に	157

よその子も叱る

“あいまいさ”反省から	166
大人のモラルの問題	169

「ふれあい」求めて

労働を通じ父親を理解	178
日記で対話の父と娘	181

あとかき

野性味のある人間に	160
-----------	-----

子に期待すればこそ	173
-----------	-----

夕食は親子会話の場	185
-----------	-----

装幀 熊谷博人

出稼ぎの村で



ネッネッ、あの子カッコいいんだよね（兵庫県宝塚市で）

子供が、思いやりのある、自立した人間に育ってほしい、と願わない親はいないはず。それは、子供を取り巻く人たちとの、温かいふれあいの中で、育まれる。祖父母、親、兄弟姉妹、友だち、先生……どのふれあいをとってみても、子供の健全な成長には欠かせない大切な人間関係。その絆が一つでも切れたとき、子供の心は不安定になりがちである。それが原因で非行に走ったり心の病にかかる。

そんな人間関係の断絶が年ごとに増えている。絆を断ち切ったものは何なのか。子供たちのさまざまな「症状」を追いながら考えてみた。

（写真は「スポーツ」シリーズです。スポーツに汗を流す全国の子供たちの姿をとらえます。本文と写真は関係ありません）

辺地に育つかぎっ子

「この十年間で、岩手の山村はずいぶん変わりました。出稼ぎによって、現金収入が増え、物質的には豊かになったようですが、精神的な面では、その荒廃は、ひどいものです。出稼ぎは、子供の教育に、大きな傷跡を、残しているようです」

盛岡市茶畑の自宅で、大牟羅良^{おおむらりよう}さんは、円い眼鏡の奥の目に、憂いをたたえて、こう話し出した。ガラス窓の向こうには、紅葉した北上山地の山なみが続いている。周りの田んぼでは、農民たちが稲刈りに忙しそうだった。このとり入れが終わると、また京浜地方へ出稼ぎに出る人が多いという。

大牟羅さんは、もう七十歳。岩手県久慈市の僻地教師の家庭に生まれた大牟羅さんは、敗戦後、満州（現中国東北部）から引き揚げて来ると、生まれ故郷の北上山地の村々を、古着の行商をして歩いた。その時の体験をもとにして書いたのが『ものいわぬ農民』（岩波新書）。その後、県国民保健連合会が発行する月刊誌『岩手の保健』の編集者になって、戦後の僻地住民の生活を記録し続けた。そして昭和四十七年からは、県教組などがバックアップする雑誌『岩手の教育』の編集を担当、高度経済成長の陰で変容する岩手の教育に、関心を寄せ続けてきた農山村問題研究家だ。そこで出稼ぎ地帯の家庭と子供の実態を知る糸口を得たいと、同氏を訪問したのだった。

大牟羅さんは『岩手の教育』を一冊、取り出して見せてくれた。巻頭には子供の詩が載っている。県下の児童の文集を集めて、子供たちのナマの声を伝えるのが、大牟羅さんの編集方針なのだ。こんな詩が載っていた。

お兄ちゃんとけんかして
ほったたをたたかれた

たかれたあとが赤くなった

そのお返しにお兄ちゃんの足をかじってやった

お父さんに「うるせえっ!」とどなられた

なんだか、うんと悲しくなった

二階に行って、せい大に泣いた

(水沢市立水沢小五年、小岩恵司)

冷え切った家庭

こうして泣いていると、母親がこっそり来て慰めてくれるのが、かつてのふつうの家庭だったろう。だが、今や兄弟喧嘩をたしなめる父親もいなければ、慰めてくれる母親までもが、働きに出るようになった。

「家庭の温かみは消え、冷え切っている家が多いのです」と大牟羅さんは言う。子供が、ふっくらした人間に育つのに欠かせない家庭の団欒。それを押しつぶしたのは、見えざる「巨大な手」なのだ――。

戦後の日本経済は、農村の停滞した余剰労働力を「出稼ぎ」という名で、都市の労働力に振り向けることによって、高度成長を維持して来た。とりわけ昭和三十六年に成立した「農業基本法」は、その引き金になった。耕作面積三ヘクタール以下の農家を切り捨て、全国の農家戸数を三分の



素振り百本くらい、ボクへっちゃらさ(名古屋・県スポーツ会館で)

一に減らすことを企てたこの法律は、零細な農民を都会へ押し出す役割を果たしたのだ。

とくに零細農民の多い東北地方では影響が大きかった。岩手県の出稼ぎ家庭は、昭和四十七年のピーク時には、全農家戸数(約十二万四千戸)の約二〇パーセント(約二万五千戸)に当たり、その出稼者数は四万二千人にも達し、青森県に次いで全国二位だった。これは職業安定所を通じて就労した農民の数だから、モグリを含めると、その数は二倍とも二・五倍とも言われた。なかでもヤセ地で換金作物が作れず「出稼ぎ常習地帯」になっている県北部の久慈・九戸地方では、農家の二軒に

一軒は父親不在の出稼ぎ家庭だった。

出稼ぎに拍車をかけたのが、テレビや耕運機など「文明の利器」の流入だった。農民は、その購入資金を稼ぐために、こぞって都会の季節労働者になって行き、「太平洋戦争の時より、村から男衆の姿が消えた」との嘆きが出たほどだったという。

この出稼ぎラッシュも、オイル・ショック以後、都会の職場減少でブレイキがかかり、「年間二万人前後に落ち着き、問題は少なくなった」(同県商工労働部・菊池昭治次長)と行

政側は楽観的な見方をする。しかし最近では、農閑期を利用した「兼業出稼ぎ型」から、農繁期だけ自宅に帰って来て、あとは失業保険を得るため、年間十カ月以上も家をあける「専業出稼ぎ型」に変化してきている。

しかも「母親も、今では村の道路工事や、誘致された工場などに外働きに出て行くケースが増え、子供が学校から帰っても、父も母もいない「カギっ子家庭」が続出している」と辺地教師たちは嘆くのだ。親のいない、ガランとした家で子供たちは、どんな思いをしているのだろうか。

疲れ切って帰る母

戦後の北上山地の農山村の変貌を見続けてきた岩手県盛岡市の雑誌『岩手の教育』の編集者、大牟羅良さんの嘆きは続く。

「父親が出稼ぎに行くと、母親がその代わりになって、子供を懸命に育てるもの、と思っていたのですが、母親も外働き（農外就労）に出る家庭が多いのです」

その動機は、より多くの現金収入が欲しい、ということだが、辺地ならではの訳もあるという。大牟羅さんは、ある農婦から、こんな話を打ち明けられたことがある。

農作業のない冬、嫁が炬燵に入っていると、姑の視線を痛く感じる。その目は「この怠け者

が……。お前のゴデエ（夫）は、東京で汗流して働いているのだぞ」と言っているようで、外働きの出ざるをえなくなるのだという。核家族化が進んでいない山村では、主婦は三食昼寝付きとはいかないそうだ。

岩手県社会福祉協議会が、県下でも出稼ぎの多い九戸郡軽米町晴山地区で、実態調査を行ったところ、農家の主婦七十人のうち六十四人（約九四パーセント）が農外就労だったという。日帰り、約三〇キロメートル離れた新産都市・青森県八戸市にある弱電機器の組み立て工場や、缶詰め工場、パートタイマーとして働いていた。

この結果、十年ほど前は、六十万円前後だった年収が、父親の長期出稼ぎと、母親の日帰り農外就労で、四百万円にも五百万円にもなる家庭がある。そして大半の家庭に、ステレオ、電気冷蔵庫、自動車……と文化的製品が備えられ、都会とほとんど変わらない生活を送れるようになった。

しかし、この調査を担当した県社協の高橋勝彦主事は「生活は物質的には豊かになったが、逆に精神的には家庭教育に問題が出始めた」と指摘する。

まず外働きの母親たちの多くは、毎日くたくたに疲れており、子供の面倒を見る気力はなくなり、母子のふれあいが乏しくなったという。「例えば」と高橋主事は、ある母親（四十歳）から聞いた農外就労の様子を再現してくれた。

朝七時に、工場差し回しのマイクロバスが村にやって来る。一時間近く山道を揺られて八戸市の缶詰め工場へ。八時から作業開始。昼までの四時間、魚を乗せたベルトコンベヤーが回り続け、ト

イレに行く時間を取るのも難しい。午後一時から五時まで、同様に緊張した作業が続く。次々と魚の頭を切り取っていく。鮮度が落ちないよう、作業は手早くしなければならぬ。水温はすべて摂氏二度以下に下げてあり、作業場は夏でも底冷えがする。真冬は寒さのあまり、空気が白い霧となって、足元を覆うほど。バスで帰宅するのは、午後七時近く。体はくたくた。食事の支度をし、後片付けをすると、体は動かなくなり、あとは、一分でも早く寢床に就くことだけを考えてしまふ……。

躰はおろそかに

都会の主婦でも、共働き家庭では似たようなものだろうが、農山村では、その仕事はより重労働だから、疲れも激しい。子供の面倒を見ることすら、おっくうになる母親が多い。風呂桶を購入していながら「母親が疲れて水をくむ意欲もなく」なり、沸かすのは週に一回という家庭が最も多く、四一パーセントもあった、という。

親子のふれあいの場として、一緒に入浴する光景は、テレビのＣＦによく登場するが、これらの地方では、入浴する機会も少ない。しかも疲れた母親は、入浴中にホッとして眠り込んでしまうから「ボッコ（赤ん坊）と嫁と一緒に風呂に入れるもんでねエ」という悲しい「教訓」が出稼ぎ常習地帯にはある、と大牟羅さんは言う。

母親が疲れていると、躰もおろそかになりがちだ。高橋主事の話では「毎朝顔を洗う」児童は七